実践報告

地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造

－2017 年度「商店街あそびの広場」実践報告－

今野聖士[1)]*　柳原高文[2)]　長谷川武史[3)]　傳馬淳一郎[2)]
堀川 真[2)]　木下一雄[3)]　宮内俊一[2)]　今野道裕[2)]

[1)] 名寄市立大学保健福祉学部教養教育部　[2)] 名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科
[3)] 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

キーワード：商店街あそびの広場　商店街　学生ボランティア

１．はじめに

商店街あそびの広場(以下、あそびの広場)は、名寄駅前商店街を会場に 2012 年度から継続的に開催されている事業である。大型商店の郊外進出や住民の高齢化、ネット通販の普及等によって、商店街を取り巻く環境は厳しさを増しており、商店街の空き店舗の発生・利活用の停滞が問題になっていることは周知の通りである。商店街の空き店舗は消費者の回遊を妨げ、新規顧客（例えば地域外から流入する学生や子育て世代）の獲得において機会損失が生じていると考えられる。そこで本事業においては商店街の空き店舗を活用し、様々な「あそび」を通して、子どもやその親の回遊を促し、さらに運営側として参加する大学生も含めて商店街をより知ってもらい、今後の利用促進や相互交流を図ることを目的としている。

2016 年度からは、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの課題研究事業として実施された。また運営に携わる学生は、ボランティアだけではなく関係教員が担当する「フィールドグループワーク[1)]（以下、FGW)や地域との協働Ⅱ」における活動の一部として位置付けて実施したケースも含んでいる。(なお、これまでの経過は清水池ほか〔2014〕〔2015〕、長谷川〔2016〕を参照)。

本稿の目的は、2017 年 9 月 30 日に実施した、2017 年度「商店街あそびの広場」の実践報告を行うことである。今年度の実施概要を述べた上で、当日来場者および参加大学生、および現在営業中の商店街店舗に実施したアンケートを中心に、あそびの広場の評価と今後の課題を考察する。

２．2017 年度「商店街あそびの広場」の概要

１）「商店街あそびの広場」実施の経緯

「商店街あそびの広場」の取り組みは、2017 年で６回目の実施となった。その経緯の詳細は 2014 年度「地域と住民」第 32 号（前掲　清水池〔2014〕）で報告してあり、ここでは簡略に述べることとする。

2010 年に MOA 児童作品展実行委員会が市街地空き店舗を活用し作品展を行い、名寄市立大学短期大学部児童学科の教員が趣旨に賛同し、学生の絵画作品を展示協力した。

担当した教員が人形劇サークルの顧問で NPO 北海道人形劇協会理事でもあったことから、2011 年に「第 52 回北海道人形劇フェスティバル」を名寄市で開催することとなった。その際に前年の空き店舗を会場に活用するというアイディアを取り入れ、市内各所で人形劇公演が上演された。MOA 主催の児童作品展も同時開催され、幼児を対象とした「ひまわりの絵コンクール」もこの年より実施されている。

しかし、人形劇公演中心の取り組みでは参加できる学生が限定される等の課題があり、「あそび」を中心とした取り組みに組み替え、名称も「商店街あそびの広場」として実施することとした。第１回「商店街あそ

*責任著者　E-mail:m-konno@nayoro.ac.jp

びの広場」は同年９月 17 日に開催している。

２）「商店街あそびの広場」の目的

以上のような経緯もあり、「商店街あそびの広場」は以下の３点を目的としている。（あそびの広場企画書より）

第１に、児童作品展や人形劇、生花・茶の湯等を中心的な媒体とした文化活動の活性化を図ることである。第２に、名寄市を中心とした道北地域の子どもたちや子どもの心をもった大人たちに、創ることの楽しさや豊かな未来を語り合う場を提供することである。第３に、大学生・学生サークルの運営および公演参加を通じて、学生と地域の交流を図ることである。

より具体的に言えば、「商店街あそびの広場」において学生と地域が繋がる場を提供することで、単なるボランティア・消費者・商業者といった枠を超えた新たな協働の取り組みを行い、今後研究や地域連携等に繋げていきたいとの意図がある。実際、詳しくは後述するが 2017 年度も 60 名以上の学生が参加しており、学生の実践的な経験の修得や地域との連携の素地となる要素は十分である。また、あそびの広場の活動によって毎年多くの親子連れ(例年、幼児を含む約 300 名以上)の参加があり、比較的滞在時間が長く回遊が見込めるため、商店街を改めて知ることで、新規顧客獲得の機会になって欲しいとの願いもある。

３）「商店街あそびの広場」の実施体制

この取り組みは、実施に至る経緯や主体が違うため「商店街あそびの広場」と「MOA 北の児童作品展」「なよろひまわりの絵コンクール」という３つの実行委員会が共催する形を取っているが、円滑な実施のため全体で１つの実行委員会として活動している。実行委員会の体制は表１の通りである。実行委員会には、その他に名寄市、名寄市商店街連合会、商工会議所、観光協会、社会福祉法人「みどりの郷」、社会福祉協議会等の参加を得ている。

表1　2017年度商店街あそびの広場の実施体制

開催日	2017年9月30日（土）
主催	商店街あそびの広場実行委員会
	委員長：今野道裕（名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科）
	事務局：藤井広明（MOA美術館）
共催	MOA美術館北の児童作品展実行委員会
	委員長：高橋藤次（株式会社高橋組）
	ひまわりの絵コンクール実行委員会
	委員長：山田典幸（農家、名寄市議会議員）
うち大学関係	
	教員8名
	内訳　社会保育学科５名、社会福祉学科２名
	教養教育部１名
	当日学生ボランティア約６０名

資料：商店街あそびの広場資料より作成

全体実行委員会は開催日までに３回開催され、商店街スタンプラリーや会場選定、各あそびのプログラム等について話し合われた。

大学主催企画についてみれば、実際の運営は主に有志の教員８名と学生ボランティア 66 名によって担われている。自主的に参加を希望する学生の他、連携教育科目である「フィールドグループワーク」「地域との協働Ⅱ」において「商店街あそびの広場」をフィールドに選択した教員に所属する学生や、ゼミ単位で教員と参加した学生などで構成されている。今年度も学内実行委員会を結成し、学生ボランティア確保の方法、アンケート実施の内容や方法、各教員の役割分担等を話し合った。

また、昨年度より「商店街あそびの広場」事業は、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの先駆的実践事業として位置づけられ、大学としての企画実施予算を得ている。

４）実施内容と昨年度からの変更点

表２に、2017年度あそびの広場の実施企画を示した。スタンプラリー・児童作品展・生花体験・茶の湯体験・ひまわりの絵、折り紙・迷路・パン特別販売・工作教室・赤い羽根協賛企画・ビデオ上映・ミニ新幹線・けん玉、コマ広場・人形劇、すごろく・絵本、紙芝居・巨大ひまわりアート・ミニ絵本づくり・射的おもちゃづくり・牧草ロールお絵かき・おり染体験・バルーン作り・積み木遊び・街角ライブといった計23企画が実行された。これら企画のうち、9企画が商店街空き店舗を会場として使用した。なお、11企画を大学が担当し、学生ボランティアが携わった。

表2　2017年度商店街あそびの広場の実施企画

	担当団体	学生配置	備考
スタンプラリー	商工会連合会		
児童作品展	MOA		
生花体験	MOA		
茶の湯体験	MOA		
ひまわりの絵・折り紙	ひまわりの絵	○	空き店舗活用
迷路	みどりの郷		
パン特別販売	みどりの郷		
工作教室	みどりの郷		
赤い羽根協賛企画	社会福祉協議会		
ビデオ上映	なにいろカフェ	○	営業店舗協力
ミニ新幹線	キマロキ保存会	○	駐車場借用
けん玉・コマ広場	大学	○	空き店舗活用
人形劇・すごろく	大学	○	空き店舗活用
絵本・紙芝居	大学	○	空き店舗活用
巨大ひまわりアート	大学	○	営業店舗前協力
ミニ絵本づくり	大学	○	営業店舗協力
射的おもちゃづくり	大学	○	空き店舗活用
牧草ロールお絵かき	大学	○	市所有地借用
折り染め体験	大学	○	空き店舗活用
バルーンづくり	大学	○	空き店舗活用
積み木（カプラ）あそび	大学	○	空き店舗活用
街角ライブ（ジャグリング）	大学	○	
街角ライブ（吹奏楽）	大学	○	

資料：商店街あそびの広場資料より作成

来場者数については明確な把握は難しいものの、スタンプラリーの配布数や各企画の参加状況等から例年同様の300人程度と推測している。

今年度の大きな変更点は、開催日を9月30日(土)と、大学の後期授業開始後としたことである。昨年までは、夏季休業期間中の実施であり、学生ボランティアの確保・確定が難しかった。また、学生ボランティアの主体となっていた短期大学部児童学科２年生が、後期授業開始と同時に教育実習(幼稚園)で名寄市不在となってしまう点も開催日を夏季休業中に設定しなければならない理由であった。

開催日を変更したことにより、学生ボランティアの数は約 60 名と過去最大の参加を得ることができた。(この数字は一般参加の学生の他、連携教育科目履修の学生、ゼミとして参加した学生等を含んでいる。）人的余裕ができたことにより、アンケート回収を主な任務とする学生を配置することができ、アンケート回収数が大幅に改善した。

また、アンケートについても変更点がある。毎年、来場者とボランティア学生に対するアンケートを実施していたが、主にアンケート用紙を留置し、回収箱を設置する形で実施していたため、来場者アンケートの回収数が少なかった。また、イベントの目的でもある商店街の賑わいとの観点では、実施場所である商店街主の方の意見を把握することが求められていたが、いずれも実施に係る人員を捻出できず、先送りとなっていた。今年は、来場者向けアンケートに関してはゼミ単位で参加した教員・学生グループが、アンケートの実施を主任務としながら各企画の運営に加わる形式を取った（社会福祉学科の１ゼミ・３年次・７名が６カ所に分散してアンケートの呼びかけをしながら企画運営に従事）ため、回収数が昨年の25から71へと大きく伸びた。また、商店街に対してもアンケートの作成を行い、有志の教員１名が各商店を回る形でアンケートの依頼と回収を行ったため、あらたに商店街主の意向を知ることが出来たのは大きな成果である（いずれも結果は後述)。

その他として、大学側の予算で「商店街あそびの広場」ののぼりを作成した。今までは手作りの会場案内板のみであったが、今後同じものを使うことができるようになり、会場の目印として認知度向上が期待される。また別事業で作成協力した「なよろすごろく」(名寄市観光交流振興協議会作成）を拡大し人形劇会場に配置し、好評を得た。

３．あそびの広場大学企画分実施のための準備活動

あそびの広場における大学の企画を実施するためには、運営計画といったソフト面だけではなく、各種工作や飾り付けといったハード面の準備が必要となる。この作業は従来FGWを中心とした学生(とその指導教員)によって担われてきたが、カリキュラム改正に伴い、地域との協働Ⅱ(全学科必修・２年・通年 15 回)を履修した学生が加わった(教員が“地域”のフィールドとして「あそびの広場」を選択した場合にその教員に属する学生グループが準備活動に参加する形となる)。よって以下ではFGWと地域との協働Ⅱそれぞれにおける準備活動について整理する。

１）フィールドグループワーク(FGW)における活動実績

FGWでは、１名の教員が担当する１グループ８名(栄養学科２名、看護学科５名、社会福祉学科１名、カリキュラム割り当ては３年生・通年 30 コマ)で“「9/30(土)第６回商店街あそびの広場」を学生の立場から成功させる。大学・学生の地域貢献のあり方について、実践的に考える”をテーマに活動した。第１段階として「企画についての打合せ」(13 コマ)を行い、企画内容の理解や新しい取り組み(企画)、当日のボランティア参加学生数を増加させる戦略立案、イベントの周知と参加者数の確保・拡大といった準備作業を行った。活動の詳細は別掲の表３に譲るが、実際の市街地の視察や他地域の視察、当日子供に紹介するためにまず自ら遊んでみるといった実践的内容も多く含まれている。

第２段階としては、９コマ分を割り当て、当日のための物品作成や各企画運営主体間の調整のほか、当日の運営作業があげられる。とりわけ当日使用する物品の作成作業は継続的に実施する必要があるため、特定の講義時間だけでなく、夏休み中に各自時間の確保可能な際に申請して作業を行う、いわばフレックス形式で講義運営を行ったことで、細く長く準備作業要員を確保することに成功している。一方で担当教員の負担は増加しており、今後の課題となっている。

第３段階として、事業終了後にアンケート結果や各自の感想を突き合わせた振り返り作業、次年度へ向けた反省とまとめの作業、FGWの講義としての報告会資料づくり等を行っている。

２）地域との協働Ⅱにおける活動実績

地域との協働Ⅱでは、１名の教員が担当する１グループ 11 名(栄養学科１名、看護学科１名、社会福祉学科４名、社会保育学科５名、カリキュラム割り当ては２年生・通年 15 コマ)で、FGWと同じく“「9/30(土)第６回商店街あそびの広場」を学生の立場から成功させる。大学・学生の地域貢献のあり方について、実践的に考える”をテーマに活動した。コマ数が少ないため、前述のFGWより縮約した流れとなっている。第１段階として「企画についての打合せ」(6 コマ)を行い、企画内容の理解や、当日のボランティア参加学生数を増加させる戦略立案、イベントの周知と参加者数の確保・拡大、現地視察や関係者との交流などの基礎的な学習と準備作業を行った。FGWと同様に活動の詳細は別掲の表３を参照されたい。

第２段階としては、５コマ分を割り当て、当日のための物品作成や当日の運営作業を行った。当日使用する物品の作成作業は前述のFGWと同じく、いわば自己申告制のフレックス形式を２回分取り入れて、夏期休暇中の作業に充てている。

第３段階として、事業終了後にアンケート結果や各自の感想を突き合わせた振り返り作業、次年度へ向

けた反省とまとめの作業、地域との協働２の講義としての報告会資料づくり等を行っている。

表3　フィールドグループワーク及び地域との協働Ⅱにおける　学生の準備活動の概要

日付	活動概要	充当コマ数		段階とその目標	
		FGW	地域との協働Ⅱ	段階	目標
4月17日	全体オリエンテーション	2	2		理解
4月24日	グループオリエンテーション	2	1		昨年までの様子・企画内容
5月8日	あそびの体験・参加学生確保の方法について検討	1			現地視察・外部視察
5月15日	あそびの体験		1		企画
5月22日	あそびの体験・活動の見通しについて検討	1		1	昨年までの企画・課題
6月12日	市街地視察		1		新しい課題（学生・運営・連携）
6月19日	市街地視察・新規企画案検討	2			実践準備
7月10日	西興部視察ほか	3			参加学生の拡大
7月24日	関係者交流ほか	2	1		企画実行準備・連携・調整
夏期休暇中	準備作業（フレックス）	4	2		準備作業（ハード面、ソフト面）
9月29日	前日準備	2		2	連絡調整
9月30日	当日運営	3	3		当日運営
10月2日	反省	2	1		反省
12月11日	まとめ作業	1			まとめの作成
12月18日	まとめ作業	2			発表準備
1月15日	報告準備	1	1	3	発表会
1月22日	報告会	2			
1月29日	報告会		2		

４．アンケート結果から見る各主体の状況

１）来場者

来場した保護者を主な対象としたアンケート用紙を各企画会場で配布し、会場内の複数個所に回収場所を設置した。昨年度は回収数が少ないことが課題となっていた。そこで今年度はアンケート回収数を増やすため、前述の様にスタンプラリー回収場所、人形劇・イベント本部、ひまわりの絵・折り紙、缶バッジ作り、折り染め、バルーンの６か所にアンケート回収担当の学生を配置し、来場者へのアンケート回答依頼と回収を行った。結果として昨年度よりも多く回収数は71（昨年度25）となった。主なアンケート結果として、あそびの広場への参加回数（表4）については、「初めて」が全体の約半数（35名）と最も多かったが、これまでの全てに参加していると回答する方もいた。

あそびの広場参加への満足度を尋ねた項目（表5）では、「とても満足」47名、「やや満足」21名と、回答があった者全てが満足を回答していた。商店街の利用頻度を尋ねた項目（表6）では、「月に1〜2回」および「年に数回」との回答が多く（それぞれ22名）、日常的な商店街の利用が無い方が多く参加していたことが分かり、あそびの広場への参加が、数少ない商店街との接点になっていると考えられる。

あそびの広場への要望に関する自由記述では、『色々な所で色々なことがやっていて楽しくてありがたいです。』、『大学生の方々がとても親切で、子供が安心して参加できていた。商店街に行くことが少ないので、子ども

表4 あそびの広場の参加回数

選択肢	件数
初めて	35
2回目	14
3回目	8
4回目	5
5回目	2
6回目	3
計（有効回答）	67

表5 あそびの広場の満足度

選択肢	件数
とても満足	47
やや満足	21
やや不満足	0
とても不満足	0
計（有効回答）	68

表6 商店街の利用頻度

選択肢	件数
ほとんど毎日	1
週に１〜2回	8
月に１〜2回	22
年に数回	22
利用したことがない	3
計（有効回答）	56

にとってもよい経験でした。存続してくれてうれしい』と好意的な意見が寄せられた一方、『地図にイベントの場所を書いてほしい』、『オムツ交換のスペースがあればうれしいです』、『イベントの看板がもう少し目立つのぼりだと見つけやすく参加しやすいように思った』、『スタンプラリーで店舗ごと、1 つ特別商品を出していると店の売り上げになると思う』など、あそびの広場自体への要望や商店街との関わり方への意見なども寄せられ、今後のあそびの広場を改善していくための意見が得られたことも、回収数が上がったことが要因であると考えられる。

２)大学生(ボランティア)

参加した大学生を中心にしたボランティアへのアンケートについては、イベント終了後に用紙を配布・回収している。参加学生の総数は 66 名、うちアンケート回収数は 42 名となっている(回収率 63% [2])。

参加したボランティアの所属(表 7)としては、社会保育学科の学生が最も多かった。また昨年度から名寄高校ボランティア局に所属する生徒の参加や一般からの参加者もおり、ボランティア参加者の広がりが見られる。あそびの広場ボランティアの参加回数については、回答 42 名の内、3 名のみが「2 回目」、それ以外の 39 名は「初めて」と回答しており、継続的な参加が少ないことが分かった。

表7 所属

選択肢	件数
社会保育	17
社会福祉	8
看護	5
栄養	3
高校生	4
一般	2
計（有効回答）	39

ボランティアの実施頻度(表 8)については、最も多かったのは「初めて」で 11 名であり、半数以上が日常的なボランティア経験が少ない者であった。

表8 ボランティア頻度

選択肢	件数
毎週	1
月１～2回	4
半年に１～2回	10
年に１～2回	8
ほとんどない	5
初めて	11
計（有効回答）	39

ボランティア参加理由(表 9)を見てみると、昨年度以前からの傾向として講義の一環(FGW や地域との協働Ⅱ)での参加や所属ゼミ教員からの誘いなど、自主的な参加以外の学生も多数いた。イベントの継続や発展性を考えていくと、次年度以降も継続して参加したいと思える仕掛けが必要である。

表9 ボランティア参加理由

選択肢	件数
興味があった	14
講義の一環	18
サークルの一環	8
教員等に誘われた	7
ボランティアの興味	5
以前も参加していたから	0
その他	1
計（有効回答）	53

アンケートではこれまでに実施したアンケートと同様に、参加した動機ならびに参加による成果の 2 つの点を中心にした項目も設定している。妹尾・高木(2013)の「ボランティア活動動機測定尺度項目」18 項目と「援助成果測定尺度」17 項目を参考に、前者に「教員・友人に誘われたから」「商店街に興味があったから」の 2 項目を追加して 20 項目、後者から 1 項目を削除した上で「あそびの広場に参加してよかった」「来年も遊びの広場に参加したい」の 2 項目を追加して 18 項目の質問を行った。回答結果には「強くそう思う」4 点、「ややそう思う」3 点、「どちらとも言えない」2 点、「あまりそう思わない」1 点、「全くそう思わない」0 点、の内容で得点を付け各質問項目の平均値を求めた。

表 10 は、参加ボランティアの活動動機測定尺度である。「人に喜んでもらえる」(3.4)、「自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる」(3.4)など、活動自体に対する評価は高かった。それに対して、「自分の持っている知識、技術を使う練習になる」(2.8)、「余暇が有効に使える」(2.8)、「毎日の生活に充実感が出る」(2.9)、「友人を得ることができる」(2.7)など、参加ボランティア自身への効用としては低い評価となっている。これらは、ボランティアとしての活動内容が固定的であったため、担当ブース内での交流はある程度図ることができたと考えられるが、それ以外との交流や自由時間が少なかったことが要因と考えられる。毎回の課題となってしまっているが、参加ボランティアもあそびの広場全体を体験できる柔軟

な参加体制を整え、ボランティアと子どもや保護者との関わり、商店街との関わりをさらに増やしていくことが重要である。

表 11 は、参加ボランティアの援助成果測定尺度である。高い値となったのは、「あそびの広場に参加してよかった」(3.6)、「活動そのものが楽しめた」(3.5)、「来年もあそびの広場に参加したい」(3.5)、「人に対して思いやることを意識できた」(3.4)、「活動を通じて喜びや感動を経験した」(3.4)、「対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた」(3.4)、「人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた」(3.4)などである。活動動機測定尺度と同様に、活動自体に伴う評価が高かった一方、「仲の良い友人ができた」(2.9)、「必要とされていることが実感でき自信につながった」(2.9)、「対象者の幸福と安寧のための新たな目標ができた」(2.9)などが低い評価であり、ボランティア活動を通して何かを得る、または成長するという点では今後も改善の余地があると考えられる。

このように今年度は、アンケート実施に係る学生を配置できたため、より詳細な結果を得ることが出来た。次年度以降も同様の形式を検討する必要がある。また、来場者向けアンケートは保護者を対象としていたが、自ら回答を希望する小学生がいた（学生が読み上げ、解説する形で聞き取り記述）。このため、次年度は小学生でも理解出来るような平易なアンケートとし、希望者がいた場合には学生の補助のもとで回答出来るような工夫をしておくことが望ましい。

表10　ボランティア活動動機測定尺度

項目	平均
喜んだり楽しんだりできる	3.0
人はお互いに助け合わねばならず、自分にもその義務がある	2.9
自分の持っている知識、技術を使う練習になる	2.8
余暇が有効に使える	2.8
対象者の苦しみが和らぐ	2.4
人に喜んでもらえる	3.4
自己を再発見し、成長させることができる	3.1
対象者が積極的に社会参加できる	3.1
何らかの報酬や返礼が期待できる	2.3
社会の一員として当然のことだ	2.5
毎日の生活に充実感が出る	2.9
人や社会の役に立てる	3.2
自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる	3.4
対象者が喜びを感じることができる	3.2
友人を得ることができる	2.7
自分の知識、経験、技術を活かすことができる	2.9
他のボランティアと楽しく活動できる	3.2
活動を通じて積極的に社会参加できる	3.2
教員・友人などから誘われたから	2.8
商店街に興味があったから	2.7

表11 援助成果測定尺度

項目	平均
仲の良い友達ができた	2.9
活動そのものが楽しめた	3.5
人に対して思いやることを意識できた	3.4
活動通じて自分自身が成長できた	3.2
活動を通じて喜びや感動を経験した	3.4
対象者や他のボランティアから様々なことを教えられて勉強になった	3.2
必要とされていることが実感でき自信につながった	2.9
やりがいが生まれた	3.3
対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた	3.4
気持ちの充足感が生まれた	3.3
「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた	3.2
新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった	3.2
自分にできることで社会と関わり、人の役に立つことができた	3.3
対象者の幸福・安寧のための新たな目標ができた	2.9
人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた	3.4
日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった	3.2
あそびの広場に参加してよかった	3.6
来年もあそびの広場に参加したい	3.5

3）商店街

次に商店主に対するアンケート結果について見ていきたい。（9 月 30 日配布、10 月 10 日までに回収、29 件中 29 件回収、回収率 100%である。）イベントの初期のころより懸案事項となっていた、実施場所である商

店街主に対するアンケートを本年度新たに実施することが出来たのは大きな進歩である。

第１の設問は、「商店街あそびの広場」を知っていましたか？である。また、「知っていた」に〇をつけた方に伺います。どのようにお知りになりましたか？すべてに〇をつけてください。として、情報源を尋ねた。結果は図 1・2 に示したとおりである。図 1 から、多くの商店主（76%）は「商店街あそびの広場」を知っていたことがわかった。さらに、図 2 からその情報源は商店街連合会からであることがわかった（58%）が、当日まで知らなかった商店主が 7%（7 名）いた。その他の広報は、「当日ローソンで知った。」、「外がにぎやかだから知った。」、「インターネットで知った。」などがあった。すなわち、「商店街あそびの広場」の広報が、その開催地である商店街店主全てにされていなかったことがわかった。これは、イベント主催者側にとっては大きな課題で、現状の商店街連合会にくわえて、さらに実施や活動目的を知ってもらう多種な広報手段を考えなくてはならないと思われる。

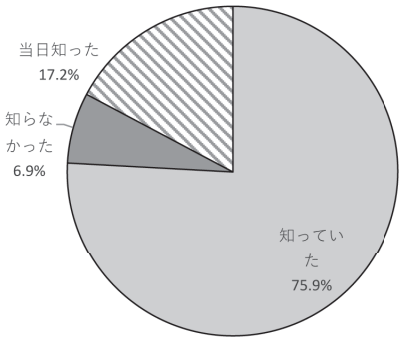

図1　「商店街あそびの広場」を知っていた割合

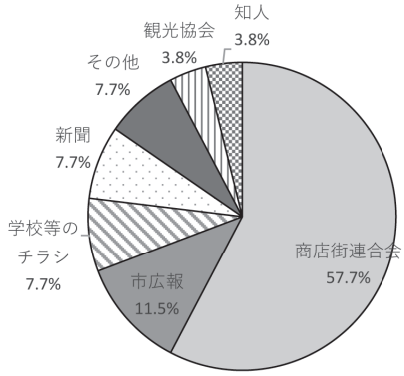

図2　「商店街あそびの広場」を知っていた方のうち　知った方法

第２の設問は、「商店街あそびの広場」の活動目的は、子どもを商店街に招くことで商店街をにぎやかにすることや、学生と地域や子どもたちとの関わりを持たせることですが、活動目的をご存知でしたか？、である。図３から「商店街あそびの広場」の目的を知っていた商店主が 68%（“よく知っている”と“知っている”の和。29 店中 20 店）であることがわかった。取り組みそのものの認知は進んできているものの、その活動目的については更なる広報が必要である事が浮き彫りとなった。

第 3 の設問は「商店街あそびの広場」に興味がありますか？、である。図 4 から「商店街あそびの広場」に興味がある商店主は約半数の 52%（29 名中 15 名）である事が分かった。現状ではあくまでも場所を貸し

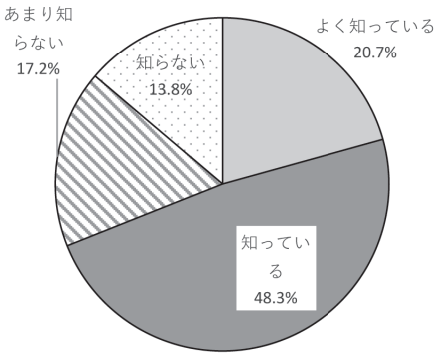

図3　「商店街あそびの広場」の活動目的の認知割合

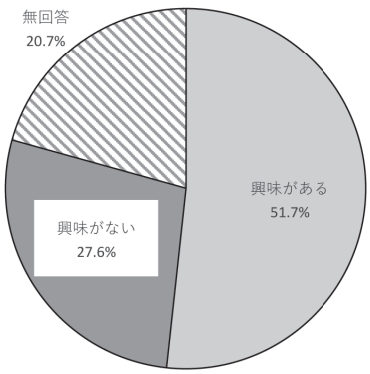

図4　「商店街あそびの広場」への興味の有無

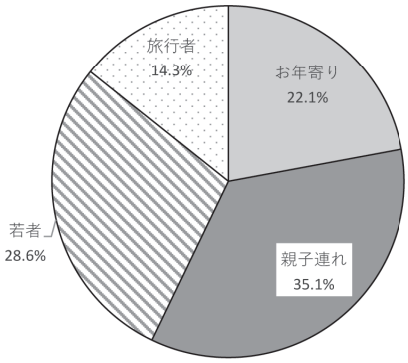

図5　商店街に来てもらいたい対象（複数回答）

て頂いているだけであり、商店街との協力関係も商店街連合会を通じてのみであるが、これだけの商店主が何らかの関心を持って頂けているのであれば、共同で事業展開が出来る素地は十分にあると考えられる。

第４の設問は商店街に来てもらいたい対象全てに〇を付けて下さい、である。図５から、商店街に来てもらいたい対象は「親子連れ」が最も多く、次に「若者」、「お年寄り」、「旅行者」の順であることがわかった。本事業は親子連れを対象としながら、運営側として参加する学生も 60 名超と多数にわたるため、商店

街主の営業活動上、メリットがあると思われるため、興味関心があるとも考えられる。

設問５は、「商店街あそびの広場」の活動は商店街をにぎやかにすると思われますか、である。
図６から、“すごく思う”と“思う”を足すと約65%となり、多くの商店主は「商店街あそびの広場」の活動が「商店街をにぎやかにする」と期待していることがわかった。

設問６は、「商店街あそびの広場」を機会に名寄市立大学（学生）にどのようなことを期待しますか？、である。回答文を以下に記す。

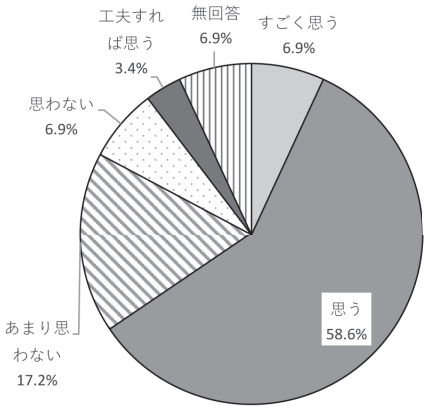

図6　「商店街あそびの広場」が商店街を賑やかにすると期待しているか

・学生が寄りたくなるようなお店のアイディアがほしい。
・空き店舗を再利用する様企画して下さい。
・若い力を期待しています。
・何もありません。
・お疲れ様です。
・色々なイベントを通して多くの通行人の賑わいがうれしい。
・学生目線での店にアドバイスも。
・地域住民と商店街をつなぐ役目。
・スタンプラリー終了後に、お客様が来店して下さったのですが、「とても良いイベントですね」とおっしゃってました！
・親子や大人も楽しめるイベントをしてほしい。
・その時だけだけと思うので。
・商店街を普段から利用してもらえたら、とてもうれしいです。
・あそびの広場を継続することにより、子どもたちに各お店を知ってもらう事も大事かと思います。
・商店との話し合い。
・学生の考えが地域を活性化することを期待している。
・人通りも多くにぎやかになります。
・スタンプを押すだけではもったいない。店を離れることができないので、それでも参加できる方法を知りたい。

聞き取りから
・広報で知った後に連合会から連絡がきた。これではよそ事になる。準備を考えたら遅くても半年前に知らせてほしい。やりたいことはたくさんある。
・以前、空き店舗のシャッターに絵を描きたいと学生からの申し出が合った。良い企画で作品も良かったが、学生が卒業したら何もなくなる。継続するシステムは大学にないのか。
・学生が商店街と関わることはとても良いことだ。いろいろやりたいが、前面に出ると引かれてしまうので難しい。
・こんなかたちで、学生や子どもたちと関われるとは知らなかった。アドバイスがほしい。
・名寄短大の卒業生です。スタンプラリーは商店を知ってもらうための良いイベントです。この先継続してくれるとうれしい。

以上の様に様々な意見が寄せられた。単発（1 日）のイベントである事に対する限界性を指摘する声もあるが、どのように商店街の活性化に取り組んで良いか判断が難しい中、このイベントに対して学生・地域と商店街をつなぐ役割を期待する声も見られる。大学だけで様々な事業展開を進めることは難しいため、大学・商店街との協働・役割分担を考え、より良い事業へ発展させていく段階に来ていると思われる。

次いで、設問２の「商店街あそびの広場の目的」の認知別結果（よく知っている⇔知らない）と設問４「商店街あそびの広場」に興味があるかどうか、設問 5「商店街あそびの広場」の活動が商店街を賑やかにするかをクロス集計した。

前者を表 12、後者を表 13 に示した。活動目的の認知度別に興味の有無を確認している（行単位で読む）。

表12　商店街あそびの広場の活動目的の認知度と興味のクロス集計

		「商店街あそびの広場」に興味が		同　割合	
		ある	ない	ある	ない
活動目的を	よく知っている	5	1	83.3%	16.7%
	知っている	7	4	63.6%	36.4%
	あまり知らない	7	4	63.6%	36.4%
	知らない	2	3	40.0%	60.0%

「商店街あそびの広場」の目的を「よく知っている」と回答したほとんどの商店主は「商店街あそびの広場」に「興味」があり（83%）、「商店街をにぎやかにする」（すごく思う・思うを合わせて 100%）と思っていることがわかった。「知っている」と回答した商店主 11 名中 7 名は「興味」があり（64%）「商店街をにぎやかにする」（64%）と思っていることがわかった。「あまり知らない」と回答した 8 名中 6 名の商店主であっても、「興味がない」と回答したのは 34%に過ぎず、関心はあること、また 64%が「商店街をにぎやかにする」と考えていることがわかった。「知らない」と回答した 5 名中 2 名の商店主であっても 40%が「興味」をもっていることがわかった。

表13　商店街あそびの広場の活動目的の認知度と期待のクロス集計

		「商店街あそびの広場」の活動が商店街を賑やかにすると期待するか					同　割合				
		すごく思う	思う	あまり思わない	思わない	工夫すれば思う	すごく思う	思う	あまり思わない	思わない	工夫すれば思う
活動目的を	よく知っている	2	4	0	0	0	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%
	知っている	0	7	2	1	1	0.0%	63.6%	18.2%	9.1%	9.1%
	あまり知らない	0	7	2	1	1	0.0%	63.6%	18.2%	9.1%	9.1%
	知らない	0	1	3	1	0	0.0%	20.0%	60.0%	20.0%	0.0%

このように「商店街あそびの広場の目的」を「よく知っている」かどうかにかかわらず、興味を持っていると回答する割合は高く、「商店街をにぎやかにする」と期待している割合も高い。一方で、積極的なイベント主催側への働きかけや、参加は見られないことから、積極性を持つにも関わらず様子を見ていると考えられる。これらの商店主は、何らかのスキームを作る事によって運営側から働きかけることが出来れば、参加が見込まれる層である。

前掲図５でも述べたが、「商店街に来てもらいたい対象」は「親子連れ」が最も多く、「若者」、「お年寄り」と続き、「旅行者」が少ないことがわかっている。すなわち市内住民、とりわけ親子連れを対象とした本イベントは、商店街主の来店期待層とリンクしており、商店街主に対するインセンティブを持っていると考えられる。よって商店街主に対する十分な広報と理解を促進し、主体的な参加を促し、共同で商店街を盛り上げるためのイベントへ発展・継続して行く事が望ましいと言える。

５．まとめ

このように、学生を主体としたボランティアおよび関係各団体によって準備・運営されている「商店街あそびの広場」は、継続的な開催によって一定の集客力を持ち、参加者側からは概ね好評な評価が得られるようになった。一方で、学生による企画運営やその成果、またフィールドである商店街主への周知・参加に関しては更なる改善・発展が必要だと思われる。以下いくつかの点について指摘したい。

まず、参加学生についてであるが、前掲のアンケート結果の通り、ボランティアによる参加・企画運営に関しては概ね好評な評価が得られているものの、未だ人手が十分に得られているとまでは言えず、学生はほぼ自身の担当部署に貼り付けとなってしまっている。このため、あくまでも運営側としての参加に留まり、各会場を周回したり、既存営業商店を尋ねてみたりといった、本イベントを機会とした商店街の賑わいそのものへの波及効果（新規顧客獲得、心理的ハードルの低減）は弱いと言わざるを得ない。更なる学生ボランティアの拡充や、サークル等外部から参加する学生の拡大、またそれをサポートする何らかの仕組み作りが必要であろう。特に学生ボランティアの中心となっている保育学科の学生は、これまで 2 年次実習の都合上、1 年生のみしか参加が難しかったが、4 大化により実習が 3 年次に移動したため 2 年生まで参加が可能となった。1 年生の参加を促し、学年をまたいで参加してもらえるような仕組み作りや魅力を作り出していく必要がある。

次に運営上の検討事項を指摘したい。まず、商店街主の積極的な参加を促す仕組み・機会を検討する必要がある。アンケート結果でも明らかになったとおり商店街主には周知が不十分であるため、様子見の方が多いと考えられる。潜在顧客の獲得と言ったインセンティブを考慮すれば、将来的な主体的な参加も十分に期待できると考えられる。さらなる周知ルートの開拓を準備段階のごく初期から進めていく必要がある。賛同が得られれば、例えば開催時期に合わせた軒先への出店や子連れ層に合わせた商品の販売といった対応、また学生のサークル等と連携して、インストアライブの開催（可能であればスポンサードして頂けるとなお望ましい）等が考えられる。

他にも、学生・大学だけでは無い、市民団体による出店やコラボ企画を促す取り組みや、単純なスタンプラリーだけでは無く商店街や名寄の歴史探検と結びつけたあらたな展開、また農業者の参画（子供向け郷土料理や地場素材の紹介等）などを検討していく必要がある。

あわせて食事や休憩のスペース問題や、老朽化によって利用可能な空き店舗が減少していること。開催時期の再検討（温かい時期＝夏期休暇中は学生が集まりにくく、講義再開後は天候不良・寒冷が課題となる）、商店街全体という広大なフィールド・約 300 人の親子連れ・地域との連携といった魅力的なフィールドを講義や研究の場面として活用しながら、より多くの学生や教員が参加できる仕組み作り等をさらに進めていく必要がある。

【註】

1 フィールドグループワークは保健福祉学部 3 年次生に開講されている連携教育科目である。5〜10 名程度のグループに分かれ演習を行い、栄養・看護・社会福祉の各分野の知識を元に、幅広い年齢の地域住民を対象に事業・行事を企画・実施することを通じて、保健医療福祉連携の仕組みや機能的な連携方法を学ぶことを目的としている。

2 図表の有効数字は小数点第 I 位までであるが、本文中では概況を簡易的につかむことが目的のため小数点第 I 位を四捨五入して整数化している。以下同様。

【参考文献】

妹尾香織・高木修〔2003〕「援助行動経験が援助者自身に与える効果―地域で活動するボランティアに見られる援助成果―」

『社会心理学研究』第 18 巻第 2 号、2003 年、pp. 106-118
清水池 義治・長谷川 武史・傳馬 淳一郎・三井 登・宮内 俊一・今野 道裕 〔2014〕「地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造 ： 2013 年度「商店街あそびの広場」実践報告」『地域と住民』第 32 号、69-81 頁、2014 年 3 月
清水池 義治・村上 正和・長谷川 武史・傳馬 淳一郎・三井 登・宮内 俊一・今野 道裕〔2015〕「来場者の評価に対応した実施企画の充実・拡大と今後の課題 ： 2014 年度「商店街あそびの広場」実践報告」『地域と住民』第 33 号、105-112 頁、2015 年 3 月
長谷川武史、今野聖士、村上正和、傳馬淳一郎、 堀川 真、宮内俊一、今野道裕〔2017〕「地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造　―2016 年度「商店街あそびの広場」実践報告―」『地域と住民』第 35 号、137-142 頁、 2017 年 5 月

【付記】
本稿は、平成 29 年度名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター研究・実践支援による「『商店街あそびの広場』～『児童文化』で学生と子ども・地域をつなぐ～」における成果の一部である。